

バルザック全集

21

東京創元社

バルザック全集 第二十一卷



昭和五十年十二月二十五日発行

訳者

加藤 尚宏
水野 亮

発行所

東京創元社
代表者 秋山孝男

新小川町一―一六 宿区新小川町一―一六
二六八―八二三―一三 二六八―八二三―一
一五 六五 一五 六五

株式会社刷株式会社
鈴木製本所 鈴木製本所
富士川洋紙店 富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集
第二十一卷

目次

村の司祭・・・・・・・・・・五

第一章 ヴェロニック・・・・・・・・七

第二章 タシユロン・・・・・・・・三

第三章 モンテニャックの司祭・・・・六

第四章 モンテニャックにおける
グララン夫人・・・・一三

第五章 ヴェロニックの死・・・・一八

【附 図・・・・・・六】

ルイ・ランベール・・・・・・・・三三

海辺の悲劇・・・・・・・・三九

解説・・・・・・・・三〇

装幀 松田正久

村の司祭

加
藤
尚
宏
訳

第一章 ヴェロニック

低リモージュの、ヴィエイユ・ポスト通りとシテ通りが交わる角には、今から三十年前には、中世時代から少しも変らぬままの姿をとどめていると思われるような、そうした商店の一つが残っていた。大きな敷石は至る所が割れ、ところどころに下の湿った地面がのぞいていて、そのため、この風変りな凸凹の舗石に氣をつけていなかったら、だれもがつまずいて転倒したことだろう。ほこりまみれの壁は、木と煉瓦、石と鉄の奇妙なモザイク模様を見せていたが、それらは歲月の力で、恐らく偶然の作用でもって、がっちりとき固められていた。巨大な梁を組んでできた天井は、百年以上も前から、上の階の重みで折れないままにたわんでいた。上の階は木骨造りで、外側は、幾何学模

様を描き出すように並べられたスレート瓦で屋根が葺かれ、昔の町民家屋の素朴な飾を残していた。木枠の十字窓は、かつては彫刻の縁飾りがついていたが今ではそれも風雨にさらされてすっかり磨滅していて、どれもこれもがたがたの状態だった。前へ突き出た窓もあれば、中へめり込んだ窓もあり、はずれ落ちそうになった窓もいくつかあった。どの窓も、雨が穿った窓枠の細いくぼみに、どのようにして運ばれたものか腐植土がたまり、春になるとそこから何本かの細かい花や、おずおずとした蔓草や、ひよろ長い雑草が芽を伸した。なめらかな苔が屋根と窓台を覆っていた。角の柱は混合式石造り、つまり煉瓦と小石がまざった石造の柱だったにもかかわらず、弓なりにしななっていて、見る人の目をおびやかしていた。この柱はいつかは、家の重みでくずおれてしまいうにちがいないように見えた。切妻壁は、いまや半フィートほど前にのしかかつていた。このため、のちに市当局と道路課は、ここの十字路を拡張する目的で、この家を買上げた上で取り壊させてしまった。この柱は、二つの通りが交わるちょうど角の所に位置していたが、彫刻を施したその柱龕がみごとなことで、リモージュの古美術愛好家の間で評判になっていた。柱龕には、革命の時に毀損した聖母像が安置されてあった。考古学者を自負する町の人たちは、そこに燭台をのせるための棚で、民間の信心家たちが蠟燭をともしたり、奉納物や花を供えたりした石の張り出し棚の跡が認められるといていた。店の奥には虫の喰った木の階段があって、二階と

三階に通じており、屋根裏部屋がその上にあった。家は隣接する二軒の家と背中合わせになっていて、奥行がなく、窓からしか明りが入らなかった。二階と三階の各階には二つの小さな部屋があるばかりで、それぞれ、一つはシテ通りに、一つはヴィエニュ・ポスト通りに面していたが、どちらの部屋も窓は一つきりで、そこから明りが入るだけだった。中世時代には、どんな職人でもこれより上等な家には住んでいなかった。この家は、かつては鎖帷子師か、鉄砲鍛冶か、刃物師か、どちらかといえは吹きさらしで仕事をするのに向いた職人のものであったことは明らかだった。通りの角にある商店に多く見られるように、この家も角の柱をはさんで両側に戸口があったが、家のこの両方の側面を閉ざしている、鉄具をうちつけた鎧戸を取りのけなければ、中は暗くてはつきり物を見ることができなかった。それぞれの戸口には、何世紀もの間に擦り減った美しい石の敷居があり、そこから肘の高さほどの低い壁が続いていた。壁には一本の溝が通っていて、両側面の上の壁を支えている梁にも、それと対をなした溝がついていた。古い昔から、この溝を滑って不細工な鎧戸が閉められ、その上から、ボルトで留めた大きな鉄板の門で固く閉ざされてきた。鎧戸を閉めたあと、同じような仕組みでいったん二つの戸口が閉ざされてしまうと、もう商人の家族たちは家の中にいて城塞の中にも同然だった。リモージュの人たちは今世紀初めの二十年間、この家の中が屑鉄や、銅や、ぜんまいや、車輪の鉄や、鐘や、解体した建築物の古

材から出るあらゆる金属類でうずまっているのを目にしたが、古い町の残骸ともいふべきこの家に興味を抱く人たちは、この屋内を仔細に調べて、細長くついた煤の跡から鍛冶炉の煙突があった場所を見つけた。この小さな事實は、家が最初何の店に使われたかについて考古学者たちが下した推定を裏付けていた。二階には一つの部屋と台所があり、三階には二つの部屋があった。屋根裏部屋は倉庫として使われ、店に乱雑に放り出してある品物よりも精巧な品物が置いてあった。この家はソーヴィアという行商人が最初借りていて、のちに買い取ったのだった。この男は、一七九二年から一七九六年にかけて、オーヴェルニュを中心に半径五十里以内の田舎を回っては、古鉄、銅製品、鉛製品など、どんな製品に化けていようと金物と名のつくものならなんでもそれと引き換えに、陶器や、大皿や、取り分け皿や、コップや、要するにごく貧しい家庭にとって必要な品物を、交換して歩いた。このオーヴェルニュ生まれの男は、二スーの褐色の土鍋一個を、一ポンドの鉛、または壊れた鋤、折れた鋏、割れた古鍋など二ポンドの鉄と交換した。彼はいつも自分に都合のいいように判決を下す判事となつて、自分で屑鉄の目方を測った。三年目からは、ソーヴィアはこの商売に加えて、鋳物の商売も始めた。一七九三年には、国家の命によって公売に付された城館を一つ手に入れて、それを解体した。彼はそれでひと儲けしたが、恐らく彼は、その行動圏内の各地で、同じ手を使つて何度か儲けたに違いない。この最初の試みもとになつ

て、彼はのちに、バリにいる同郷人の一人に大掛かりな事業をもちかけることを考えついた。こういうわけで、その徹底した破壊行為で極めて名高い解体同盟はソーヴィア老人の頭から生まれた。二十七年間というものの、このみずばらしい店の中で、割れた鐘や、門や、鎖や、鉄の支柱や、ねじ曲った鉛の樋や、その他あらゆる種類の屑鉄に取り囲まれて暮らしているのをリモージュ中のだれもが見てきた、この行商人の頭からである。彼自身は、この結社の有名度もその規模の大きさもついぞ知らなかったといっても、それは認めてやらなければならない。彼はただ、有名なブレザック商会に資本金を預け、それに応じた配当を受けることでそれを利用しただけだった。市の開かれる場所から場所へ、村から村へと旅をして回ることに疲れたこのオーヴェルニュ生まれの男はリモージュに住居を定めたが、彼はここで、一七九七年にシャンパニヤックというやもめの鋳物屋の娘と結婚した。三年間妻を伴ってさらに田舎回りの商売をしたのち、彼は家に腰を落ちつけて屑鉄商の店を構えたが、男が死ぬと、借りていた家を買収取った。シャンパニヤック老人の娘と結婚したとき、ソーヴィアは五十歳に達していたが、女の方も恐らく三十歳以下ではなかった。このシャンパニヤックの娘は美しくもなければ可愛らしくもなかったが、オーヴェルニュの生まれだった。それで、方言がお互いの魅力になった。それから、彼女は女が極めてきびしい労働にも耐え得るための、あの太い頭をもっていた。だから、彼女はソーヴィアについて商

売にも歩いて回った。鉄や鉛を背負って帰るもしたし、種を明かせば高利貸同様の夫の商売だったが、その商売道具の陶器類をぼろの荷馬車に山と積んで、手綱をとりもした。褐色の髪をもち、血色がよく、素晴らしく健康に恵まれたこのシャンパニヤックの娘は、笑うとアーモンドのように長くて大きな白い歯をのぞかせた。最後に、彼女は自然が母になるように作った女たちの、あの胸と腰とを持っていた。この逞しい娘がもっと早くに結婚せず独り身が続けていたというのは、彼女の父親が、モリエールなど一度も読んだことはなかったが、アルバゴン口癖の《持参金なしだぞ》を実行していたからにはかならなかった。ソーヴィアは、この《持参金なしだぞ》にたじろがなかった。それに、五十男が文句を言える筋合いではないし、その上、女房を貰えば女中を雇う費用が要らなくなるわけだった。彼は、現に自分の部屋にあるもの以外には何一つ新しい家具を買収足さなかった。婚礼の日から引越しの日に至るまで、そこにあつたものといえは、ぎざぎざ模様縁どつた天蓋の垂れ幕と緑色のサージのカーテンとで飾られた四柱寝台と、食器戸棚と、箆筒と、四脚の肘掛椅子と、テーブルと、それに鏡だけで、これらはいずれも商売に出かけた方々の土地から持ち帰ったものだった。食器戸棚の上段には錫の食器類が入っていたが、全部不揃いだった。台所も寢室からおして似たり寄ったりなものであることは、だれにも想像がつこう。夫婦は二人とも字が読めなかったが、このちょっとした教育上の欠陥も、別に立派に金

勘定をしたり、どんな商売にもまして商売を繁昌させていくための障害にはならなかった。ソーヴィアは、百パーセントの儲けで売れる確信がなければ、何一つ品物を仕入れなかった。彼は、帳簿をつけたら、帳場を設けたりしないですむように、すべて現金で売買した。おまけに、彼は非常に素晴らしい記憶力を持っていたので、五年も店に売れ残っていた品物でも、彼ら夫婦は、一リヤル^{*}位の違いはあっても、買値を思い出して毎年利息の分だけ値上げした。ソーヴィアの女房は、家事をしている時をのぞいてはいつも、店の柱を背にして置いた粗末な木の椅子にすわっていた。彼女は編物をしながら、通行人を眺めたり、屑鉄の番をしたり、また、ソーヴィアが品物の買入れで旅に出ている時には、自分が屑鉄を売ったり、目方を測ったり、配達をしたりした。毎朝、夜の明ける頃になると、屑鉄商が鑑戸を動かす音があたりに響き、犬が通りを走って逃げだす。やがてソーヴィアの女房が出てきて、夫の手伝いをしながら、ヴィエイユ^{*}ポスト通りとシテ通りに面してそれぞれ低い壁がそのまま売台をなしているその上に、呼鈴とか、古いゼンマイとか、鈴とか、壊れた銃身とか、彼らの商売用のがらくたを並べるのだった。これらのがらくたは看板代りになっていたが、しばしば二万フランにも相当する鉛や、鋼鉄や、鐘が置いてあったこの店に、かなりみすばらしい外観を与えていた。かつての古物行商人もその女房も、自分達の財産のことについては一度も口に出したことがなかった。まるで犯罪者が罪を隠すように彼らは財

産を隠していて、長い間、人からルイ金貨やエキュ銀貨の縁を削り取っているのではないかと疑われた。シャンパン^{*}が死んだ時、ソーヴィア夫婦は財産目録を作らず、親の家をすみずみまで鼠のような知恵を働かせてくまなく探しまわった揚句、死骸のような知るはだかにして家を放り出した。そして鋳物類は店に運んで、自分たちで売ってしまった。一年に一度、十二月になると、ソーヴィアはパリに出かけていったが、その折には彼は乗合馬車を利用した。このため、この界隈の観察家連中は、人に財産を知られないように屑鉄商が自分で出かけていってパリで投資をしているのだと推測していた。あとになってわかったことだが、彼は、同じオーヴェルニュ出身の、パリで最も有名な金属商の一人と若い頃から親交を結んでいて、自分の資金を、あの解体同盟^{グッド・リィ}と呼ばれる名高い結社の中核であるブレザック商会の金庫^{グッド・リィ}の中でふとらせていたのだった。この解体同盟^{グッド・リィ}は、すでに述べたように、ソーヴィアの提案によってパリに創設されたもので、彼は同盟者の一人だった。ソーヴィアは、やつれた顔をした、太った小柄の男で、身にとことなく客を魅きつける誠実そうな様子をそなえており、それが商売の繁昌のために役立っていた。そのそっけない受け答えとまったく冷淡な応対ぶりは、売手である彼の言い分を通すのに一役かっていた。血色のいい顔色が、縮れた髪とあばたの顔一面にふりかかった金属の黒い埃の下に、辛うじて見分けることが出来た。彼の額は気品に欠けることなく、ちょうどあらゆる画家が、使徒の中で

もつとも厳格で、もつとも庶民的で、またもつとも手腕家の聖ペテロに与えた、あの古典的な額に似ていた。手は疲れを知らぬ労働者の手で、大きく、分厚く、四角ばって、何種類もの固い亀裂の皺ができていた。上半身は、頑健な肉付きを見せていた。彼は行商人時代の服装をけつして改めなかった。即ち、鉾を打った大きな靴、革のゲートルの下にはいた女房手編みの青い靴下、濃緑色のビロードのズボン、格子縞のチョッキ——そこからは銀時計の銅の鍵がぶらさがっており、銀時計には、使い古されて鋼鉄のようにびかびかに光った鉄鎖がついていた——、ズボンと同類のビロードの小さな垂れのある上着、それから、首のまわりには、ひげですり切れたルアン織りのネクタイ、といういでたちだった。日曜と祭日には、ソーヴィアは栗色のラシャのフロックコートを着たが、これは非常に手入れをよくしていて、新しいのにとり換えたのは二十年間に二回きりだった。徒刑囚の生活も、ソーヴィア夫婦の生活に比べるとまだ贅沢といえるかも知れないほどで、肉を食べるのも大祭の日だけだった。日常の生計に必要な金を出すときになると、まずソーヴィアの女房はドレスと下袴の間にある両方の隠しポケットを探り、例外なく六リール銀貨や五十五スー銀貨の端の削れたひどい硬貨を取り出し、絶望的な目でそれを眺めてから、やつとその一つを小銭に替えるのだった。ほとんどいつも、ソーヴィア夫婦は、鯨や、赤いんげんや、チーズや、ゆで玉子入りのサラダや、もつとも安あがりな味つけした野菜だけで我慢していた。いた

みにくく、値段の張らないにんにくや玉葱を幾束か買う以外は、彼らはけつして買い置きをしなかった。冬の間に使う僅かばかりの薪は、ソーヴィアの女房が道を通る薪売りから、しかも毎日その日の分だけを買うのだった。冬は七時、夏は九時に夫婦は店を閉めて床に就き、あとは、この界限の家の台所で餌をあさって生きている彼らの大きな犬が、店の張り番をした。ソーヴィア婆さんは蠟燭代を年に三フランと使わなかった。

この人たちのつましい、勤勉な生活が、一つの喜びで、一つの自然な喜びで、活気づいた。このために、彼らは唯一つのおおっぱらな出費をした。一八〇二年の五月に、ソーヴィアの女房が女の子を産んだのである。彼女は一人でお産をし、五日後には、起きて家事をしていた。彼女はいつもの椅子に腰かけ、吹きさらしで自分の乳を与えて子供を育てていたが、赤ん坊に乳を吸わせている間も、肩鉄を売のをやめなかった。自分の乳を飲ませているぶんには一文もかからないので、彼女は二年間も子供に母乳を与えていたが、別にそれで子供のからだに支障はきたさなかった。ヴェロニックは、この下町一番の美しい子供になり、通りがかりの人たちは、足をとめてはヴェロニックのことを見た。近所の女たちはこの時になって、ソーヴィア老人のうちにいくらか情愛らしいものがあるのを認めた。というのも、そんなものを彼はまるきり持ち合わせていないと思われていたからである。女房が食事の用意をしている間、この商人は赤ん坊を抱いて、オーヴェルニュの民謡を

小さな声で歌って聞かせては、静かにゆすりながらお守りをしていた。職人たちは、時おり彼が、母親の膝の上で眠っているヴェロニクに身動きもせずに見入っている姿を目にした。娘に対しては、彼はその荒々しい声を和らげ、彼女を抱きあげる時は、その前にまず両手をズボンでぬぐってから抱きあげた。ヴェロニクが歩き出そうとする、父親はしゃがんで、子供から四歩ばかり離れたところから両手を差しだし、そのいかつく、厳しい顔に刻まれた金屬のような深い皺をうれしそうにくしゃくしゃによせて、愛想笑いをしてみせるのだった。鉛と、鉄と、銅でできたこの男が、血と、骨と、肉の男になった。角の柱に背をもたせかけて、彫像のようにじっと動かないでいる時でも、ヴェロニクの泣き声がすると不安になり、屑鉄を飛び越して彼女を見つけに行った。実は、彼女はこの広々とした店の奥に山と積まれた城館の残骸を玩具に幼年時代を過ごしたのだったが、それでいて怪我は一度もせずにすんだ。表通りや、近所の家に行つて遊ぶこともあったが、けつして母親は彼女から目を離さなかった。ソーヴィア夫婦が極めて信心深い者達だったということも、言つて置いて無駄ではなからう。革命の真最中にも、ソーヴィアは日曜と祭日の行事を守っていた。彼は宣誓をしていない司祭のミサを聞きに行ったために、危く二度も首をはねられそうになった。ついには、ある司教の逃亡を手助けして命を救つたという当然の廉で、投獄される破目になった。さいわい、この行商人はやすりと鉄格子にかけては明るかったので脱

獄することができたが、そのかわり彼は欠席裁判によって死刑の宣告を受けた。ついでながら、彼はけつして欠席裁判故障を申し立てるために出頭しようとはしないで、死刑になった人間として一生を終えたのである。女房の方も、彼と同じように信心深い心を持っていた。この夫婦の客奮も、宗教の呼びかける声だけに譲歩した。屑鉄商のこの老夫婦は、きちんきちんと神に捧げる聖パンを寄進し、義捐金の募集には献金をした。サン・テチエンヌの助任司祭が彼らのところへきて援助を求めれば、ソーヴィアも女房も、勿体ぶつたりいやな顔をしたりせずに、小教区内でする喜捨のうち、自分たちの分担だと思われるだけのものをするぐさま出してきた。角の柱の毀損した聖母像には、一七九九年以来、復活祭になるといつもつけの枝が飾られた。花の季節には、青いガラスでできたラッパ型の花瓶に新しい花を活けて祭つてあるのが、通行人の目に入った。ヴェロニクが生まれてからは、とりわけそうだった。聖体祝日の行列が行なわれる時には、ソーヴィア夫婦は、花を一杯にあしらつた幕を念入りに家の回りに張りめぐらし、飾りつけや、この四辻の自慢の種になる仮祭壇の設置に協力した。こういうわけで、ヴェロニク・ソーヴィアはキリスト教徒として育てられた。七歳になるとすぐ、ソーヴィア夫婦が前に少しばかり役に立つてやったことがある、オーヴェルニュ生まれの慈善団の修道女が彼女の家庭教師についた。ソーヴィア夫婦は二人とも、自分たちのからだと時間だけですむことであればかなり人に親切で、一種の真

心をもつて自分の身を提供する貧乏人と同じ流儀での、世話ずきなだった。修道女はヴェロニクに読み書きを教え、またユダヤ人の歴史と、教理問答と、旧約及び新約聖書、それに算数をいくらか教えた。それで全部だったが、修道女はそれだけで充分のはずだし、それでもすでに多すぎるくらいだと思っていた。九歳になると、ヴェロニクの美しさは界限の人たちを驚かせた。だれもが感嘆したその顔は、やがては、ひたすら理想美を求めてやまぬ画家たちの筆に描かれるにふさわしいほどの美貌になるかもしれない。彼女は『小さな聖母さま』と仇名され、姿の美しい、色白の女になりそうだった。そのマドンナのような顔——たしかに世間の人たちはなかなかうまい呼び名をつけた——を豊かな、ふさふさとしたブロンドの髪が一層完全なものに仕上げていたが、この髪のために、顔だちの純潔さが一きわ浮き立ってみえた。ティツィアーノが、その傑作『宮詣で』の中で描いた崇高な『幼き聖母』を見た人ならだれでも、幼年時代のヴェロニクがどんな子供であったか想像がつくだろう。彼女は、『聖母』と同じ天真爛漫なあどけなさと、両眼に表われた淨らかな驚きの表情と、気品のある純真な態度と、王女のような高貴な様子とをもっていた。十一歳の時、彼女は天然痘にかかり、マルト尼の看護のおかげで、やっと命を取りとめた。娘の命が危かった二箇月間、ソーヴィア夫婦の娘に対する愛情がどれ程深いものかを、この界限中のものが知った。ソーヴィアは、もう競売にも出かけて行かず、始終店にいて、絶えず

娘の部屋に上っていつては、また降りてくるのだった。夜は夜で、欠かさず、妻と一緒にあって看病をした。彼の無言の苦悩があまりに深刻なものに見えたので、だれも思い切って彼に言葉をかけることができなかった。近所の人達は同情の目で彼を眺め、ただマルト尼だけに、ヴェロニクの容態を尋ねた。病状が悪化してもっとも危かった何日かの間、生涯においてこの時ただ一度だけ、ソーヴィアの臉の間から、涙がいつまでもこぼれ落ち、くぼんだ頬を伝って流れるのを、通行人や近所の人達は見た。彼は涙を拭おうともせず、娘の部屋へ上って行く勇氣もないまま、うつろなまなざしをして、何時間もほうけたようにしていた。店の品を盗まれてもわからなかったに違いない。ヴェロニクは命をとりとめたが、彼女の美貌は失われてしまった。褐色と赤とが均等に溶け合った色調で一様に染まったその顔には、小さな穴が無数にできて、そのため、皮膚は分厚くなり、白い肉の層も奥深くまで冒されていた。額も、病災の被害からまぬがれることができず、色は褐色に変わり、まるで槌で打ったような具合になった。ブロンドの髪に対して、この煉瓦色の色調くらい不釣り合いなものはない、それは、予め定められた調和をぶち壊しにしてしまうのである。地肌の、この凹んだ、形もまちなちな傷あとによって、横顔の清純さと、顔の輪郭や鼻や——そのギリシヤ鼻はほとんど影をとどめていなかった——白い磁器の縁のようなデリケートな顎の繊細さが、損われてしまった。病氣の影響を受けない目と歯だけが、無きずのまま残っ

た。それからまた、ヴェロニクは、身体の優雅さと美しさ、豊かな曲線、胴体の優美さも、失わなかった。十五歳になると、彼女はひとかどの美しい娘になり、しかもソーヴィア夫婦にとって何よりの慰めだったことに、彼女は敬虔で善良な娘に育って、せっせと仕事をし、よくたち働いて、家からほとんど外へ出ようともしないのだった。病氣から回復し、最初の聖体拝受がすむと、両親は娘に、三階にある二つの部屋を彼女の住む部屋として与えた。自分と女房には極めて厳格だったソーヴィアも、この時ばかりは多少とも安楽な生活というものについて思いやった。娘が自分ではまだ知らないでいる損失を慰めてやろうという考えが、漠然とながら彼の頭に浮かんだのである。夫婦の自慢の種だったあの美貌が失われてしまったことで、ヴェロニクは彼らにとって前より一層可愛い、貴重な存在になった。或日、ソーヴィアは一枚の掘り出しものの絨毯をかついで帰ってきて、自分でヴェロニクの部屋にそれを敷いた。また彼は、或城館の売り立ての際に、貴婦人が使っていた赤い緞子を張ったベッドと、同じ布地のカーテン、肘掛椅子、それに椅子とを、娘用にとっておいてやった。彼は、娘が使っている二つの部屋に、やはりこれも自分で値段のわからない古道具を、いろいろと備えつけた。窓台の上には、木犀草の鉢をいくつか置いた。そして商売に出かけると、或ときは薔薇、或ときはカーネーションと、恐らく庭師が宿屋の主人に貰うのだろうが、あらゆる種類の花を持って帰ってきた。もしヴェロニクが、いろいろな比較

する目を持ち、両親の性格や習慣やその無知を知ることができたならば、こうしたいとして価値のない物の中にも、どれほど愛情がこめられていたかがわかったことだろう。しかし彼女は、深い考えもなく、優れた天性のままにそれらのものを愛しているのだった。ヴェロニクの下着類は、母親が、商店にある限りで一番上等なものを買って与えた。ソーヴィアの女房は、娘が服を作るために欲しいという布地は、何でもいうなりに買わせた。父親も母親も娘が質素であることに満足していたが、事実、彼女には金のかかる派手好みなところは少しもなかった。ヴェロニクは、祭日用に着るものとしては青い絹の服一着で我慢し、平日は、冬は厚いメリノ地の服、夏は縞模様のインド更紗の服を着ていた。日曜日には、彼女は両親と一緒に教会に行き、晩禱後には、ヴィエンヌ川沿いか、でなければその周辺に散歩に出かけた。普通の日には、彼女は家にいてもっぱらつづれ織りの刺繍をして過ごし、それを売った金を貧民に施すのだったが、こうして、彼女はもともと単純で、淨らかで、模範的な暮らしの習慣を守っていた。時には、教済院に送るリンネル製品に、刺繍飾りをつける仕事をした。仕事の合間には読書をしたが、サン・テチエンヌの助任司祭が貸してくれる本以外は読まなかった。この助任司祭とは、ソーヴィア一家はマルト尼を通じて近づきになった。

ヴェロニクに対しては、家庭経済の掟も完全に効力を停止した。母親は極上の食べ物を出してやるのが嬉しく